

# 長歌訓から見た万葉集片仮名訓本

—— 広瀬本万葉集を中心として ——

田 中 大 士

## 一

万葉集の伝本、なかんずく非仙覚系の諸本の関係については、従来その体系的な整理は行われていないといつてよい。それは、一にかかつて、非仙覚系の諸本の系統上の見極めが出来ていないことによる。非仙覚系の伝本群は、付された訓の種類によつて、平仮名訓の本と片仮名訓の本とに大きく分けることが出来る。直感的には、訓の種類によつて諸本を二分することは容易なように感じられるが、實際のところは、非仙覚系の諸本を訓の種類で二分出来ることを論証した有効な論は現れていない。ところが、諸本の長歌訓の分布を手がかりにすることにより、平仮名訓の本と、片仮名訓の本とを系統上二つに分かつことができる。のみならず、長歌訓は、両系統の関係を知る上でもきわめ

て有効な鍵になり得る。本稿は、この長歌訓という観点から、片仮名訓本の中でも特に広瀬本を中心に据えつつ、非仙覚系諸本の中での片仮名訓本の性格を明らかにすることを目的とする。

## 二

非仙覚系の伝本中の平仮名訓本と片仮名訓本とが系統上二つに分かたれることを証明するには、一方の伝本群に、もう一方の伝本群には見られない明確な特徴が指摘できなくてはならない。長歌訓の有無は、その条件を満たす有力な要素と考えられる。

万葉集の長歌は、全部で二六五首見られるが、非仙覚系の伝本には、一五〇首程度長歌訓が認められる。ところが、その長歌訓の有無は、平仮名訓本と片仮名訓本とで、極端

な傾向の違いを見せる。次の表(A)は、万葉集の非仙寛系の主要伝本における、長歌訓分布の表である。巻ごとの直下の数字は、その巻に存する長歌の数である。また、それぞれの欄の右の数字がその巻における当該伝本の現存する長歌の数、斜線を挟んで左が訓の存する歌の数である。片仮名訓本の名は太字になつてゐる。

この表から看取できることは、まず、平仮名訓本にはほとんど長歌訓のある歌がなく、一方、片仮名訓本にはそれに比べると長歌訓を持つ例がかなり多いということである。

(A) 万葉集長歌訓分布図

4	3	2	1	巻次
7	23	19	16	長歌数
0/3				桂本
0/2		0/17		金沢本
				藍紙本
				尼崎本
				伝壬生隆祐筆本
		4/4		天治本
1/6	2/18	0/16	0/14	類聚古集
1/7		0/3	0/15	元暦校本
6/7		3/3	14/15	同代緒書入
7/7	23/23	19/19	16/16	紀州本
7/7	23/23	19/19	16/16	広瀬本
7/7	14/23	17/19	11/16	京大本代緒書入
	5/5	0/3	14/14	古葉略類聚鈔
0	2	19	2	古
7	17	0	14	次
0	4	0	0	新

20	19	18	17	16	15	13	10	9	8	6	5
6	23	10	14	8	5	66	3	22	6	27	10
										0/4	
		0/1						2/22			
				0/8							
					1/4	0/66		1/4			
0/5	0/17	0/7	0/9	0/7	1/4	1/57	0/3	3/17	2/5	0/15	0/3
0/6	0/23	0/10	0/14			0/65	1/3	0/14		0/27	
0/6	18/23	0/10	0/14			4/65	3/3	14/14		26/27	
							3/3	22/22	6/6	27/27	10/10
0/5	18/23	1/10	0/14	0/8	3/5	1/66	0/1	22/22	4/5	27/27	9/10
1/5	7/23	0/10	0/14	0/8	0/5	13/66	3/3	20/22	6/6	23/27	4/10
					3/3	1/1				6/6	
0	0	0	0	0	1	1	0	5	4	4	0
0	18	0	0	0	4	2	3	17	2	22	9
6	5	10	14	8	0	63	0	0	0	1	1

桂  
金  
藍  
尼  
壬  
天  
類  
元  
緒  
紀  
広  
京  
古  
(古)  
(次)  
(新)

しかも、長歌訓を多く持つ片仮名訓本では、比較できる全ての伝本において、巻十までの長歌にはほとんどの例で訓を持つのに対して、それ以降では、巻十五・十九の二巻以外では長歌訓が見られないという傾向が認められる。また、平仮名訓本は、基本的に長歌訓はないものの、諸本で稀に訓を持つ事例は、ある特定の巻（巻三、八、九、十五）に集中するという傾向が見られる。すなわち、長歌訓の分布から見ると、平仮名訓本と片仮名訓本とは対立的な傾向を見せ、しかも、それぞれのグループの中では伝本同士同様の分布傾向を見ることが知られる。これらのことから、現存の平仮名訓本は、長歌訓がほとんど付されていない段階の伝本から派生した伝本群であり、現存の片仮名訓本はある程度長歌訓が付された段階での伝本を共通の祖としていることが知られる。すなわち、平仮名訓本と片仮名訓本とは、明確に系統上二つに分かつことが出来ると考えられる。しかも、上田英夫氏（『万葉集訓点の史的研究』昭31年）が述べるように、万葉集の伝来史は、万葉仮名訓読の歴史であるわけだから、長歌訓のない段階を反映している平仮名訓本より、長歌に訓が施された片仮名訓本の方がより新しい段階であることが知られる。

すると、現存の片仮名訓本は、長歌に訓が付された、ある特定の伝本から派生した同一の系統の本であると限定で

きる。また、それゆえ、長歌訓のほとんどは、片仮名訓本特有のものであるといえる。したがって、この片仮名訓本特有の長歌訓の様相を追求してゆくことにより、片仮名訓本の内部での諸本の関係がはつきりしてることが予想される。

### 三

あらためて、片仮名訓の本を確かめてみると、紀州本・広瀬本・古葉略類聚鈔の三本。これに加えて、元暦校本の代赭書き入れと京大本の代赭書き入れという書き入れの本が見られる。他にも、類聚古集にも片仮名訓の書き入れが見られるが、長歌訓に限ると、他とは分布の傾向も訓の内容も異なるので、今回は除外している。先述のように、片仮名訓本の内部では、長歌訓の分布は基本的に同じなのであるが、細かく見てゆくと、諸本で微妙な違いが見られる。たとえば、紀州本は、よく知られているように、非仙覚系の部分は巻十までであるが、そこにある長歌にはすべて訓が見られる。一方、広瀬本をはじめとする他の片仮名訓本には、その範囲の長歌にも若干訓のないものが見られる。訓の欠落の原因は各々様々であるが、他本に比べて紀州本にはやや整った感じがあることは否めない。

それら片仮名訓本の長歌訓の中で、他本との違いがとく

に際だっているのは、広瀬本の長歌訓のいくつかに平仮名の訓が存することであろう。広瀬本には、訓のある長歌が一五一首見られるが、そのうち十五首が平仮名訓になっている。しかも、そのうちの十二例は巻二に集中している。

巻二には十九首の長歌があるが、広瀬本では、そのうちの十二首が平仮名訓なのである。実に半分以上が平仮名訓で占められていることになる。もちろん、広瀬本全体は、平仮名訓の本であり、訓が平仮名であることは異例といつてよい。また、他の片仮名訓本においては、長歌訓が平仮名で付されている事例は見られない。他の片仮名訓本と比べても、広瀬本の他の巻と比べても、広瀬本巻二の長歌訓は、他とは孤絶した存在であるといえよう。

しかしながら、広瀬本には、今問題にしている長歌訓の他にも平仮名訓が見られる。その平仮名訓の総量、分布の仕方などによっては、広瀬本の平仮名訓自体に問題があるという可能性が浮上してくるようにも思われる。次に挙げるのが、広瀬本の長歌以外に付された平仮名訓の事例である。

2 一三九・7 一一二・7 一一四・7 一一五

7 一一六・19 四二〇・19 四二〇六・19 四二一一〇

20 四二九六（ただし、巻二末尾の重出歌）

全部で九例、全て短歌の例である。これを見る限り、片仮

名訓本の広瀬本にも、平仮名の訓は見られることが確認できる。が、万葉集中の短歌は四千首を超える。そのなかで平仮名訓はたった九例に過ぎない。もちろん、それらの例外にも何らかの理由が存するはずであるが、少なくとも、広瀬本巻二の長歌訓十九例中十二例が平仮名訓であることが、広瀬本に平仮名訓の例が他にもあるからということでは解消しうるほどの数ではないことは事実であろう。広瀬本の他の平仮名訓の存在を認めるとしても、そのことと広瀬本巻二の、長歌の平仮名訓の集中とはとりあえずは無関係と考えるよさそうである。

#### 四

しかも、広瀬本巻二の長歌訓には、平仮名訓であるというだけではない、別の奇妙な特徴が見られる。広瀬本の長歌訓は、多くの場合本文の右側に、いわゆる傍訓の形で付されている。ところが、巻二にはその付訓位置が他とは異なる例も見られる。次に挙げる表（B）は、広瀬本巻二の、長歌訓の訓の種類、訓の位置などについて、特徴を一覧にしたものである。

先にも述べたように、十九首中、平仮名訓が十二例、片仮名訓が七例ということになるが、細かく見てゆくと、さらに複雑な様相を呈している。たとえば、一三八は、第一

(B) 広瀬本巻二の長歌訓の様相

歌番号	句数	訓の仮名の種類と位置
一三一	39	片仮名左傍訓
一三五	39	片仮名傍訓
一三八	43	傍訓・第一句だけ片仮名、あとは平仮名
一五〇	13	平仮名傍訓
一五三	13	傍訓・第二句だけ片仮名、あとは平仮名
一五五	15	平仮名傍訓
一五九	21	平仮名傍訓
一六二	20	平仮名傍訓
一六七	65	平仮名・傍訓、左傍訓が入り交じる
一九四	29	平仮名左傍訓
一九六	75	平仮名傍訓
一九九	149	片仮名傍訓
二〇四	16	平仮名左傍訓
二〇七	53	片仮名・第二十二句まで傍訓、あとは左傍訓
二一〇	57	左傍訓・第十七句まで平仮名、あとは片仮名
二二三	55	傍訓・第三句まで平仮名、あとは片仮名
二二七	34	片仮名傍訓
二二〇	45	片仮名傍訓
二三〇	29	訓無し・別に平仮名訓有り

句だけが片仮名で、あとは平仮名であるし、二一三などは、第三句までが平仮名で、あとは片仮名になっている。この

ように、一、二句だけの变化を含め、途中で訓の種類が変わっている例が四例も見出せる。巻二には、訓における仮名の種類の混在が、歌同士だけでなく、一首中にも見られるということがある。

また、訓の位置についても、他巻の長歌と同じく右側に傍訓で付される例が十三例、左側に傍訓で付される例が三例、訓が別置される例が一例と様々であり、さらには、右傍訓、左傍訓が一首の中に混在するという例すら二例見られる。

次頁(C)に示すのは、一六七の例である。この歌では、訓は平仮名で付されている。冒頭から訓は本文の右側に付されているが、第六行(①とある部分)の「すへろきの」の次の「しきしまくにを」からは訓が本文の左に移行している。しばらくその形で続いているが、丁が改まった②では、また本文の右側が変わっている。そして、③の下辺で再び左側に移行している。変転きわまりないといった具合である。もともと、訓の位置が変わったところを子細に見ると、そのあたりに「伊云」という書き入れが存し、訓はそれを避ける形で移行しているようにも見られる。だが、このたぐいの書き入れは、広瀬本の長歌の他所にも見られるが、それによって訓の位置が移動する例は巻二以外には見られない。やはり、このような訓の移動は、巻二特有の

事情によると考えざるを得ない。

また、二一〇では、訓は一貫して本文の左側に付されているのだが、訓の種類が途中で変わっている。冒頭から第十六句までは平仮名訓なのだが、第十七句「蜻火之」の訓「かやりヒノ」となっている。つまり、「かや」までは平仮名で、「リヒノ」は片仮名になっている。そして、残りの四十句は一貫して片仮名になっている。

右のように、長歌の途中で訓の位置が変わってしまった例は、広瀬本の中でも、他には巻三の二三九、一例があるだけだし、訓の種類が変わる例に至っては、巻二以外には皆無である。広瀬本巻二の長歌訓には、訓の種類、訓の位置など、様々な要素について混乱が見られると云ってよからう。

### 五

では、広瀬本の長歌訓における、平仮名訓をはじめとする混乱が、どうしてほかならぬ巻二に集中しているのだろうか。先述のように、非仙覚系の伝本において、長歌訓は片仮名訓本の特徴であり、平仮名訓本には長歌訓は稀である。実際、巻二においても、金沢本、元暦校本、類聚古集などの平仮名訓本には、長歌訓は見られない。伝本全体の傾向から見ても、長歌訓が平仮名であるということは、きわめて奇異な現象といえよう。

### (C)

わろのりーのなまりかたりにて成りたる神のまゝあつ  
天地之物時久望之天河原八百萬千萬神之神集

### ①

わろのりーのなまりかたりにて成りたる神のまゝあつ  
天地之物時久望之天河原八百萬千萬神之神集  
知食登草原力水穂之國乎天地之依相之極所知  
行神之命乎天雲之八重櫻刑田一云天雲之八重  
神乎原春  
之高岬日之皇子波飛鳥之淨之宮小神隨女布座  
而天皇之敷座國乎天原石門乎爾神上之座以二神集  
乎

### ②

日乃能りりいむとあの一云食日四方之人力大板之思  
力乃満波之計式跡天下  
兼而天水御而待介何方今沖念食可出縁母元喜  
乃思余宮柱太布座沖在香乎高知座而明余神  
主不神向日月之敷少狐壁其故皇子之宮人行方  
不知毛 一云利竹之皇子宮人降道

### ③

日乃能りりいむとあの一云食日四方之人力大板之思  
力乃満波之計式跡天下  
兼而天水御而待介何方今沖念食可出縁母元喜  
乃思余宮柱太布座沖在香乎高知座而明余神  
主不神向日月之敷少狐壁其故皇子之宮人行方  
不知毛 一云利竹之皇子宮人降道

そこで、長歌訓という観点から、万葉集の巻二という巻を改めて見直すと、この巻が伝来上他の巻とはやや異なつたところのあることがわかる。手がかりは、仙覚本にある。仙覚は、鎌倉時代に万葉集の多くの本を参照しながら、校訂本を作つたが、その校訂本には、当時参照した諸本の情報が多様な形で残されている。ことに訓についてそれが著しい。ここで関係することだけ記せば、墨で記された訓は、古点。これは、基本的に、平安期村上朝に、源順ら梨壺の五人が付した訓という位置づけである。朱の訓は、仙覚以前に訓のない歌に対して、仙覚が新たに訓を付したものであることを意味する。そして、訓の肩に朱の合点が付されているものは、次点、すなわち、古点以降に付された訓と仙覚が認定した訓を意味する。この古点・次点・新点の違いを、巻別に表示したものが、先の表(A)に見られる。なお、仙覚本における古点・次点・新点の区別は、西本願寺本など複数の仙覚文永本系の伝本においてややばらつきが見られるが、諸本を見比べて、適宜筆者が判断した。表(A)の下方がそれに当たる。「古・次・新」とある各欄の数字がそれぞれの巻の古点・次点・新点の数である。仙覚本の訓は、よく知られているように、圧倒的に古点が多いのだが、長歌訓においては、古点は少なく、次点・新点が多いことが看取される。また、次点・新点の分布には大

きな偏りがあり、巻十までは次点が多く、新点は少ない。一方、巻十三以降では、逆に次点が少なく、新点が多くなっている。この分布は、片仮名訓本の長歌訓と密接な関係があると考えられるが、ここでは詳しく言及しない。<sup>3)</sup>

さて、仙覚本全体において、長歌訓は次点・新点が多いのだが、一巻だけ次点も新点もない巻が見られる。それが巻二なのである。巻二には十九首の長歌があるが、仙覚本の表示はそのすべてが古点ということになっている。仙覚本の長歌訓では、全体に古点の占める割合が小さく、全体の一四%にすぎない。そのなかで、すべての長歌が古点であるという巻二はきわめて特異な存在であるといえよう。従来訓のない歌に付したとされる新点はともかく、仙覚が、古点・次点の区別を何を根拠に判断したかは、よくわかっていない。次点について詳細に追求している上田英夫、前野貞男両氏も、その点については不明としている。<sup>4)</sup>しかし、少なくとも、仙覚が巻二だけ長歌訓をすべて古点と認定しているわけだから、最低限巻二に関しては長歌に由緒あると認められる訓が存在したと考えられる。一般的には、それは比較的古い伝本に長歌訓があつたということが考えられる。そして、それは、やはり常識的に考えて、平仮名訓の本であつたと推察される。すなわち、仙覚が参照した伝本の中に、巻二の長歌にすべて訓が備わつたものがあつた

ことが示唆されているといえる。ところが、先述のように、現存の巻二の平仮名訓本のほとんどには訓は見られない。ただし、巻二に長歌訓を持つ平仮名訓本が一つだけ現存する。天治本である。天治本には、巻二に四首の長歌が残存しており（ただし、検天治本を含む）、そのいずれにも訓が備わっている。残っているのはたつた四首ではあるが、偶然残った四首すべてに訓があるということは、本来巻二の長歌すべてに訓があつた可能性が高いと考えられる。この天治本を仙覚が見ていたか否かはわからないが、天治本は、天治年間頃（一一二〇年代）書写の伝本であり、少なくとも、仙覚以前に巻二に平仮名訓本で長歌訓が存した伝本が存在したことは確かめられる。さらにいえば、天治本は、仙覚が底本に用いた源親行本と同じく、忠兼本を祖としていることが知られている（『校本万葉集』首巻）ので、仙覚が校訂に用いた諸本と天治本とに関わりがある可能性はあるといえよう（この点後述）。平仮名訓本に見られる長歌訓は、先述のように、基本的に片仮名訓本になって新たに加えられたと考えられるが、巻二に限っては早くから平仮名訓本に長歌訓が備わっていたといえよう。

## 六

すると、巻二に集中している広瀬本の長歌の平仮名訓は、

この平仮名訓本の長歌訓と何らかの関係があるのではないかと考えられる。それでは、この両者はいかなる関係にあるのか。現存の平仮名訓本で巻二の長歌訓が見られるのは、天治本だけである。そこで、まず、天治本の長歌訓と広瀬本の平仮名訓とを比較してみることにする。天治本巻二の残存する長歌は、一三一、一九六、一九九、二三〇の四首である。そのうち、広瀬本で平仮名訓になっている歌と重なるのは、一九六、二三〇の二首である。次にあげるのは、一九六の両者の主要な訓の異同である。比較のために、仙覚文永本の西本願寺本と、非仙覚系の紀州本の訓を併記してある。

	上瀬	石橋渡	石橋	絶者生流
	西ノホリセニ	イハハシワタシ	イハハシノ	タユレハオユル
	紀ホトリセニ	イハハシワタシ	イハハシニ	タユルハオフル
	広のほりせに	いははしわたし	いしはしに	たゆれはおゆる
	天のほりせに	いしはしわたし	いしはしの	たゆれはおふる
	干者波由流	何然毛	黄葉挿頭	君与時々
	西カルレハハユル	ナニシカモ	モミチハカサシ	キミトトキトキ
	紀カハケハハユル	ワキモコモ	モミチヲカサシ	キミトトキノ
	広かはけははゆる	なにしかも	もみちをかさし	きみと時との
	天かはけははゆる	わきもこも	もみちをかさし	きみとときとの

右の訓の一覧で、まずわかることは、広瀬本と天治本とで訓にさほど大きな違いは見られないということである。

もちろん、中には、「何然毛」について、天治本が紀州本と同じく「わきもこも」と訓じ、広瀬本が西本願寺本と同じく「なにしかも」と訓じているなど注目すべき異同も見られるが、全体として両者の訓はきわめてよく似ているといえる。しかも、右の長歌は、全体で七十五句に及ぶ大型の長歌であるが、そのうち、仮名遣いを除く諸本の訓の異同は十八句にしか見られない（本稿では、そのうちの八例を掲出した）。つまり、七十五句中五十七句では諸本に異同がないということである。そして、異同のある訓の様相が右の通りであることを考えると、広瀬本、天治本の訓がいかかに似ているかが知られる。このような類似は、少なくとも、両者がこの長歌を別個に訓じていては生じないと考えられる。すなわち、両者の訓は、ともにある特定の訓から派生したものであることになる。また、広瀬本が平仮名訓であるもう一つの一三一においても両者の訓の類似は同様であり、さらに天治本に残る他の二首（その二首については、広瀬本は片仮名訓であるが）についても事情は変わらない。つまり、巻二における、平仮名訓本の天治本と広瀬本の長歌訓とは大変近い関係にあるといえよう。また、先の表の広瀬本、天治本の訓に対して、紀州本をはじめと

する片仮名訓本の訓もほぼ同様の類似関係が見られ、天治本が長歌訓を持つ他の三首についても同様である。

このことは、巻二の長歌訓において、片仮名訓本の訓は、平仮名訓本の訓を踏襲していることを強く示唆するように思われる。では、万葉集全体で、平仮名訓本に長歌訓がある場合、片仮名訓本の訓といかなる関係にあるのだろうか。平仮名訓本が長歌訓を持つ例は、先の天治本の例を除くと十一首、十五例見られる。その歌番号は次の通りである。

3 三二七（類） 3 四二三（類） 4 七二三（元・類）  
8 一五〇七（類） 9 一七四七（藍・壬） 9 一七五五（藍・類） 9 一八〇〇（類） 9 一八〇一（類）  
10 一九三七（元） 13 三二二五（類） 15 三六九一（天・類）

これらの平仮名訓本の長歌訓と、広瀬本をはじめとする片仮名訓本の訓とを比較すると、やはり、別個に訓じられたとは考えられない類似性を持っている。平仮名訓本に長歌訓がある場合は、当然片仮名訓本よりも古いと考えられるので、片仮名訓本では、先行する平仮名訓本で訓があつた時は、その訓を踏襲していることが知られる。すなわち、巻二における、天治本と広瀬本との長歌訓の類似は、片仮名訓本が平仮名訓本の訓を参照したことによると考えられる。本稿では、たまたま巻二に長歌訓がある平仮名訓本と

して、現存する唯一の天治本と広瀬本を比較したのであるが、両者の訓が類似していることにより、広瀬本などの片仮名訓本が参照したのが、他ならぬこの天治本に見られる訓と少なくとも同種の訓である蓋然性が高いことがわかる。また、平仮名訓本で長歌訓が稀な状況で、他にもう一種類長歌訓が存することは考えにくいので、仙覚本に見える巻二の「古点」の長歌訓もやはり天治本と同種のものと同種と推測される。

現存の片仮名訓本の祖となる本は、それまで訓のなかった長歌に訓を付していったと考えられるが、巻二においては、他の巻と異なり、すでに存していた平仮名訓本の訓を踏襲したと考えられる。そのような事情をふまえて、広瀬本巻二の、平仮名訓が混じるなどの様々な長歌訓の混乱を考えると、それは、片仮名訓本が平仮名訓本の訓を自らの形に写し取る際の混乱なのではないかと推測される。

天治本巻二の長歌訓は、本文の後に平仮名訓がまとめて置かれる、いわゆる別提訓の形になっている。現存する平仮名訓本の長歌訓はすべてこの形なので、参照された平仮名訓本も同じ付訓形式であったと考えられる。一方、広瀬本のほとんどの長歌訓は、本文の右側にいわゆる傍訓の形で付されている。これは、他の片仮名訓本と同じ形である。それら片仮名訓本が、平仮名訓本の長歌訓を写し取ってゆ

く場合、自らの付訓形式に合わせて写し取ると想定されるのだが、それは、訓の種類、訓の位置いずれも変換しながらの作業となる。広瀬本巻二に見られる長歌訓の様々な混乱は、この際に生じたものではないかと考えられる。

訓を写し取るという程度の作業で、これほどの混乱が生ずることにはやや不審が残る。が、巻二ほどではないが、広瀬本の長歌訓には、訓の状態が通常と異なった例が見られる。たとえば、訓の位置が途中で移動する例、本文の左に訓が付される例、別提訓の例などである。それらの事例の歌番号だけを次に挙げる。

平仮名訓 3三八八・6九七一・6九七三

訓の位置移動 3二三九

左傍訓 3四四三・3四七五・8一四二九・9

一七四二

別提訓 3四二三・8一四五三・8一五〇七・

9一七四〇・13三三二五

右のような例がある巻が、巻三、八、九という、平仮名訓本に長歌訓が存する巻に集中することに気づかされる。

ことに、別提訓の太字になっている例は、実際に平仮名訓本の長歌訓が存する例である。すなわち、広瀬本において、長歌訓が通常と異なる歌は、本来先行の訓が存したのであるところ集中していることが知られる。

広瀬本において、平仮名訓本が長歌訓を持つ巻に、訓の種類や位置などに混乱が見られるということは、それらが、平仮名訓本からの転記の際の混乱であることを暗示させる。そのなかで巻二が、他の巻に比べて突出して混乱が大きいのは、この巻が他巻に比べ、圧倒的に先行する長歌訓が多かったためと考えられる。ところが、広瀬本以外の他の平仮名訓本、紀州本などにはこの種の混乱はほとんど見られない（古葉略類聚鈔、15三六九一に一部左傍訓の例が認められる）。元暦校本代赅書き入れなどの書き入れ本の場合、

元の本における訓の位置などについては不明な点もあるが、知られる範囲では、広瀬本のような混乱は確認できない。先述のように、現存の片仮名訓本は、同一の系統と考えられ、長歌訓を新たに付した共通の祖本から派生したと考えられる。その転写関係において、もし、紀州本などのように、長歌の訓が、一貫して片仮名で、本文の右に付されている伝本が先にあつたとしたら、広瀬本のような、訓の混乱した本は生まれ得なかつたと考えられる。また、広瀬本の内部で、他巻のように長歌訓が片仮名で付されている例が先にあつても巻二のような混乱は生じないであろう。すると、広瀬本の、巻二の長歌訓の状況は、現存の片仮名訓本の祖本が、長歌訓を取り込むときの、ごく初期の状況を色濃く反映していると考えられてくる。これまでの叙述で

は、現存片仮名訓本の祖本の存在を想定しながら進めてきたが、その祖本の様相は、ほかならぬ広瀬本に残っていると考えられるわけである。<sup>(6)</sup>

## 七

広瀬本が、片仮名訓本の初期の状況を残しているという点からすると、さらに注目すべきことがある。広瀬本は、今問題になつている長歌訓と、短歌の訓とでは付訓の形式が異なる。すなわち、短歌では本文の左側に訓が付されているし、長歌では、先述の巻二などの例外を除けば、本文の右に訓が付されている。が、両者の違いは、単に付訓の位置だけにとどまらない。短歌の場合、訓は本文の左側に付される。つまり、本文、訓の順番で並ぶわけだが、本文と訓とは必ずしも対応しているわけではない。例えば次の通りである。

引レケケ長ツテ  
立易古京跡成者通之志堅草長生念墨前<sup>報</sup>  
夕イキバトフルーミヤコトナリヌバミチノバクナカクオミケト

右のように、本文と訓は同じく一行で記されながら、たとえば第二句の「古京跡」と「フルキミヤコト」との位置の違いでわかるように、万葉仮名の該当する部分に訓が来て

いないことは明らかである。この歌は、長歌一〇四七（巻六）の反歌であるが、その長歌の訓の様相の一部を示せば、次の通りである。

怨寧樂放京御作歌一首 并短歌  
 八隅知之 吾大王乃高敷為日本國者皇祖之神之  
 神代自敷夜流國生有春尙礼座持椰子之劍進  
 玉下所知座路八百萬千年多愛而定家者幸城京

各句ごとに本文と訓とは一貫して対応していることが知られる。この長歌は、全体が六三句に及ぶが、一貫して本文と訓は対応している。内容の上では、長歌反歌は、相並び密接な関係を持つている。にもかかわらず、訓の様相はかように異なっている。このことは、広瀬本では、短歌の訓と長歌の訓とが根本的に異なった方針で付されていることをはつきり物語っている。実際、長歌反歌に限らず、広瀬本では、短歌の訓と長歌の訓は全体として右のような違いを見せている。本文に対して、訓が対応するか否かは、付訓する人間の、訓に対する意識を如実に反映する（竹下豊「万葉集抄」解説 『冷泉家時雨亭叢書』39 平6年）。

すなわち、万葉仮名の本文を、一首の歌として総体的にとらえた場合は、訓は本文に必ずしも対応しないし、一方、

本文をいかに訓むかという意識が強ければ、訓は本文に対応することになる。したがって、広瀬本の短歌の訓と長歌の訓とは、訓の位置だけにとどまらぬ、明確な意識の差が存していると考えられる。広瀬本の短歌訓の方は、本文の左に置かれていたということと、本文との対応が意識されていないこともあり、本質的に平仮名訓本の付訓態度に近い。一方、長歌訓の場合、本文に密接に付されているという点で、紀州本などの他の片仮名訓の本に近いと考えられよう。紀州本では、先の短歌一〇四八の訓は次のように、本文に密接に付されている。

年久しき事ト有るハ 幸ノ 心ハ 幸ノ 幸ノ 幸ニケリ  
 立物大立江成古道く志望早也幸本幸也

もちろん、紀州本では長歌の一〇四七においても同様に本文に密接に訓が付されている。紀州本では、訓は一貫して本文に即して付されているといえる。それに対して、広瀬本は、全体は片仮名訓の本ではあるが、短歌の訓と長歌の訓とは、明らかに性格に違いがあることが確認できよう。

片仮名訓本の中で、短歌の訓が左側にある伝本は、広瀬本とその同系統の本に限られる。つまり、広瀬本の短歌の付訓形態は現存伝本中でも特殊な存在といえよう。その短

歌の訓には、付訓位置にも付訓態度にも平仮名訓本と共通する性格が看取されることになる。一方、長歌訓のほとんどは、伝来上次点期に新たに付された要素である。その長歌訓には、他の片仮名訓本と同様の付訓態度が看取されるならば、従来の性格を持つ短歌訓と、新しい性格を持つ長歌訓とを併せ持つ広瀬本は、まさに平仮名訓本から片仮名訓本への移行の中間に立つ伝本であると考えられる。すなわち、短歌の訓がまず付されて、次に長歌の訓を付す段階になって、訓に対する認識が改まり、長歌訓は右側に本文に即応する形で付されるようになったと考えられる。当面問題になっている広瀬本巻二の長歌訓の混乱は、それら長歌訓が付されるもつとも初期の段階に生じたものと考えられる。

### 注

- (1) 長歌訓をめぐる平仮名訓本と片仮名訓本との系統上の関係については、「長歌訓から見た万葉集の系統―平仮名訓本と片仮名訓本―」（『和歌文学研究』第89号掲載予定）に詳細を述べている。
- (2) 広瀬本の引用は、『校本万葉集』別冊一（三）（平6年）による。以下同じ。
- (3) 片仮名訓本の長歌訓のある歌の分布と、仙覚本の長歌の次点表示のある歌の分布はほぼ一致している。これは、
  - (4) 仙覚が参照した諸本における長歌訓の分布が現存の片仮名訓本とほぼ一致していることを示唆しており、仙覚が見ていた伝本の内実を知る上で重要な手がかりになると考えられる。詳細は別稿を用意している。
  - (5) 上田氏先掲書・前野貞男『万葉次点考』昭36年
  - (6) 当面の巻二の長歌訓は、金沢本などに訓のない状況からすると、厳密な意味での古点⇨梨壺の五人が付した訓ではない可能性が高い。しかし、本稿では、仙覚がすべての長歌訓を古点と認定していることから、当時巻二には平仮名訓本の長歌訓が存したであろうことを推論しており、その限りで、巻二の長歌訓が実際に古点であるか否かは問題にならない。
  - (7) 広瀬本自体は、江戸後期書写の伝本である。したがって、本稿の主張は、広瀬本には、平仮名訓本を祖としながら、片仮名訓本（現存の片仮名訓本の祖）が作成される際の痕跡が比較的生の形で残っているということである。
  - (8) 山崎福之「本文批判はどこまで可能か」（国文学 第41巻6号 平8年5月）は、竹下氏のこの発言を受けて、訓が本文に即応するか否かという観点から、万葉集の伝本の性格を探る上で重要な意味を持つことを述べている。
  - (9) 紀州本の引用は、後藤幸三『複製紀州本万葉集』（昭和16年）による。
  - (10) 広瀬本巻二が、長歌訓が付される最も早い段階であるならば、他巻と比べて巻二の長歌訓の本文と訓の対応は

どうなっているかという疑問は当然生ずる。広瀬本巻二の長歌訓のうち、本文に訓が一部対応していない例が五例（二六七・一九四・一九六・二〇四・二一三）見られるが、そのうち四例が平仮名訓の例で、一例が一部平仮名訓の例である（表（B）参照）。

〔付記〕 本稿は、平成十六年度上代文学会大会（平成十六年五月十六日於奈良女子大学 題目「長歌訓から見た万葉集の系統」）における口頭発表に基づく。席上ご質問いただいた諸氏に感謝申し上げます。中でも、廣岡義隆・乾善彦両氏には大会の後にも、貴重なご助言を賜った。記して感謝する。